

藤原京の水洗式トイレ遺構

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

貯留式のトイレ遺構を発掘した藤原京右京七条一坊西北坪の調査（奈良国立文化財研究所『藤原京跡の便所遺構』1992年5月）以降、古代のトイレについての関心が高まり、各地からトイレ遺構発見の報告が聞かれるようになった。その間、発掘した遺構がトイレか否かの判定には、堆積土の寄生虫卵分析が最も適していることが明確になった。そして最近この方法を用いて、藤原京跡内で水洗式のトイレ遺構を確認したので、以下その概要を報告する。

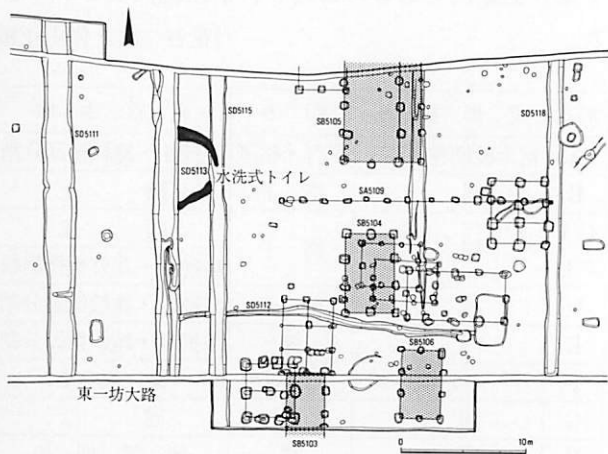
1993年秋、橿原市教育委員会が実施する藤原京右京九条四坊の発掘調査で、貯留式のトイレ遺構を発見したとの連絡を受けた。発掘担当者である露口真広氏の案内で現地を訪れると、調査区南半の土坑(SX02)は、間違いなく貯留式のトイレ遺構であった。ところが同じ調査区の北半で、道路側溝から弧状に分岐する奇妙な形態の溝が目についた。木樋こそ使用しないものの、道路側溝の流水を宅地内に引き込み、排便後の水を再び側溝に流し出すという、平城京左京二条三坊の水洗式トイレと基本的に同じ構造の遺構である（橿原市千塚資料館『かしはらの歴史をさぐる2』1994年4月）。堆積土中に籌木は見あたらず、ウリの種もさほど顕著ではない。早速、堆積土の虫卵分析を金原正明氏（天理大学付属参考館）に依頼した。その結果、貯留式トイレの堆積土に比べると虫卵の密度は低いものの、1ccあたり500個ほどは存在し、これをトイレ遺構と解釈してもよいとの結果が得られた。

この水洗式トイレ遺構SX01は、西四坊々間路東側溝の東岸に掘られた半径1.7mほどの弧状の溝で、幅40～60cm、深さ約30cm、内部には砂質土が堆積していた。調査では、道路と宅地内とを分ける堀などの痕跡は認められなかったが、本来は両者を分ける簡単な遮蔽施設が存在し、それに沿うようにトイレが配置されたものと思われる。

この発見を契機にして、藤原京内でもう一例、水洗式トイレ遺構が浮かび上がってきた。1986年に実施した左京二条二坊西北坪の発掘（藤原宮第48次調査）で検出した溝状の遺構SD5113がそれである（奈良国立文化財研究所編『藤原京左京二条一坊・同二条二坊発掘調査報告』1987年3月）。この遺構は、東一坊大路東側溝の東岸に掘られた弧状の溝（半径2.8m、幅0.6～1.1m、深さ20～30cm）で、規模はやや大きいものの、形状や堆積土の様子など右京九条四坊例に酷似する。科学的な検討を経ていないが、この弧状の溝を7世紀末の水洗式トイレ遺構(SX5113)と理解して誤りないだろう。なお、この調査でも道路と宅地とを分ける堀などの遮蔽遺構は確認されていない。（黒崎 直）



右京九条四坊の水洗式トイレ（北から）



左京二条二坊の水洗式トイレ遺構図